ワイン好きが嵩じてワインサロンを主宰<その1>
～58歳で単身、ボルドーへワイン留学～

2008/10/20

東京・銀座の並木通り。高級ブランドが軒を連ねる一角にある「シャンソニエ　マダム REI 窓」。普段は料理や酒とともにシャンソンを楽しめる店だが、1～2 カ月に 1 度、ワインの会が開かれる。開催はたいてい日曜の昼下がり。その日、シャンソニエはワインを片手に、楽しく語り合う大人たちの憩いの場となる。

ワイン会「Salon de vin（サロン・ド・ヴァン）」を主宰するのは金子三郎さん（64 歳）。サラリーマンだった金子さんだが、若い頃からワインに魅了され続け、いつかフランスでワインを学びたいという夢を持つようになった。その思いに突き動かされ、ついに、58 歳で単身、ボルドーへ飛んだという経緯をもつ。

金子さんをそこまで駆り立てたのはいったい何だったのだろうか。

年季の入ったワイン好き

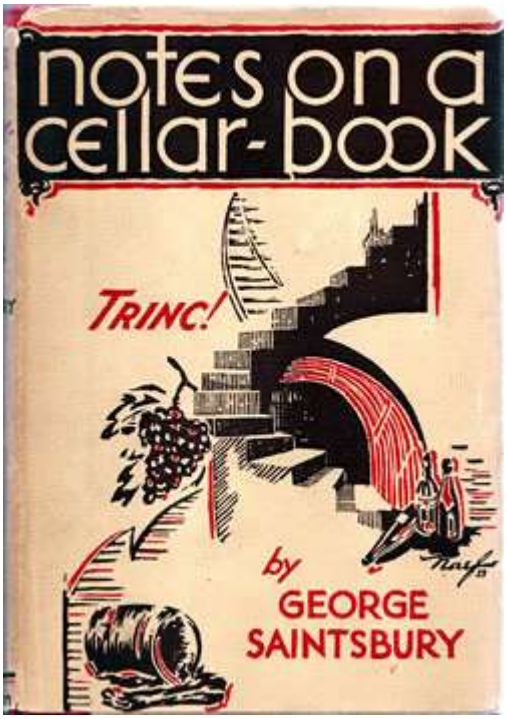
ワイン好きは数多くいるが、金子さんの場合は、ただのワイン好きの枠には収まらない。ハイカラな家庭で育ったという金子さんは、まだワインが日本人に浸透していない時代から、すでに日常的にワインが楽しめる環境にいたという。ワインとの付き合いに年季が入っているうえに、思いもかなり深い。

ワインサロンを主宰する金子三郎さん

2008 年 Salon de vin の「パリ祭」にて。奥が金子さん

ワイン好きが嵩じてワインサロンを主宰<その1>
～58歳で単身、ボルドーへワイン留学～

「今振り返ると、どうして 64 年物のワインがおいしいと思ったのか、不思議です。取り立ててワインの出来がいい年でもありませんでしたし、当時にしてみれば、まだ若いワインでしたから。おそらく、味とか香りというよりも、“シャトー”という文字に、憧れを抱いたのではないでしょうか」。



金子さんが多くを学んだ古い文献

家 1 軒分の金額のワインを飲み干す

関西に勤務していたときは、毎月給料が出るたびに、お気に入りのワイン専門店に足を運んだ。店を通じてワイン仲間もできた。金子さんが顔を出すと、店主も早々に店を閉めて、惜しげもなくいいワインを何本も飲ませてくれた。

ワインが好きになればなるほど、さまざまなワインを試したくなる。ワインの本を片手に各地のワインセラーを回った。日本で手に入らないと聞くと、フランスのブドウ畑にまで出かけたこともあった。「今まで飲んだワインの金額を合わせれば、家が一軒買えたと、妻にはよくからかわれるのですよ」と金子さん。

現役時代、シャトー・ディケムのサリュース伯爵と

ワイン好きが嵩じてワインサロンを主宰<その1>
～58歳で単身、ボルドーへワイン留学～

マルゴー村にて、友人のワイン商人と

恵まれていたサラリーマン生活だったが

当然、ワインを取り巻く文化や歴史といったバックグランドへの興味もわくようになる。金子さんはワインに関する書物を国内外から何百冊と買いあさった。中には 18 世紀と思われる古い文献もあったという。

そして、いつしか自分をワインの世界にいざなったシャトー・バタイエを生み出した地・フランスでワインを学びたい――そんな思いに駆られるようになっていた。

金子さんのサラリーマン生活は、恵まれていたといえる。会社の処遇にも、入社してからの仕事にも不満はなかった。50 歳を過ぎるころには、社長付きスタッフの責任者として、各方面の人脈を構築することもできた。

しかし、定年が見える年齢に差し掛かったころ、金子さんはふと考える。金子さんのお父さんは、62 歳という若さで亡くなっていた。自分も、その年に近づいてきている。残された人生には限りがあるのだ。今やりたいことをやらないと、後悔することになるのではないか。

やっぱり好きなワインを学びにフランスのボルドーへ行こう！　金子さん 57 歳。早期退職を決断した。

その頃の金子さんはフランスで学びたい、ただ、その一心だった。帰国してから、学んだワインの知識を生かして、何か新しい仕事をするという思いにすら至ることはなかった。贅沢な留学願望だったといえる。

ワイン好きが嵩じてワインサロンを主宰<その1>
～58歳で単身、ボルドーへワイン留学～

生活資金を試算してみたら・・・

しかし、当然ながら、留学には費用がかかる。それは退職金で賄えるとしても、帰国してからの生活資金、定年後の生活資金はどうするか。「私なりに試算してみたのです。すると、今の手持ち資金では75 歳までしか続かないということがわかりました」。

さあ、どうするか。「妻にその事を告げたら、その時はそのときで、何とかなるんじゃないのと言ってくれたのです。心強かったですね」。奥さんは、金子さんが若いころからフランスでワインを学びたいという希望を持っていることを知っていた。だから、反対しなかったのだ。息子も同じだった。この家族あってこその留学である。

金子さんが選んだ留学先は、ボルドー第 2 大学醸造学部の社会人コース。情熱と縁に導かれ、ボルドーへ渡った金子さんだが、実は、この大学はフランス人にとっても難関と言われるところだった。何とか合格したい、ここで学びたい。金子さんはワインに対する想いのたけを論文に綴った。その思いが通じたのか、見事、試験を突破。こうして、金子さんのボルドーでの留学生活が本格的に始まった。

後に、ボルドーのある醸造家が、知人の父親だったということがわかった。ワインの世界に入るきっかけはボルドーワインだったから、留学先にボルドーを選ぶのは当然としても、金子さんはボルドーと自分にはやっぱり縁があった、ボルドーが自分を呼び寄せたと思った。

次回は、ボルドーでの留学生活と、帰国後に仲間を集めて楽しく、マイペースで開催している「ワインの会」の活動を紹介する。

世界遺産のサン・テミリオン。奥は葡萄畑

金子さんの「ボルドー便り」

http://perfectnet.jp/bordeaux/

（フリーライター＝杉野治子）

ワイン好きが嵩じてワインサロンを主宰<その2>
～いつかは本場フランスでワインの会を～

2008/10/27

ワインを片手に語り合い楽しいひと時を過ごせる“大人の憩いの場”・会員制ワイン会「Salon de vin（サロン・ド・ヴァン）」。前回は、その会を主宰する金子三郎さん（64 歳）が、57 歳でサラリーマン生活に終止符を打ち、フランス・ボルドーに留学するまでを紹介した。今回は、渡仏した金子さんの留学生活、ワインが開いた金子さんの新たなセカンドステージを紹介しよう。

ワインのプロと一緒に学ぶ日々

憧れの地、フランスのボルドー第 2 大学醸造学部でワインを学ぶことになった金子さん。 ところが、思いのほか高度な授業に驚いたという。金子さんが門戸をたたいたのは、ワインや醸造のプロがブラッシュアップのために通う社会人コースだったのだ。「分厚い辞書を買い込み、毎日の予習復習は欠かせませんでした」。

留学は楽しかったと語る金子三郎さん

歴史はボルドー第 3 大学の専門家の教授が担当、醸造の知識は有名なシャトーの専門家から学ぶ。深い知識、そして、化学的なアプローチなど、ありとあらゆる方面から、ワインだけではなく、ワインのバックグラウンドの“文化”すべてを教えるというシステムだった。

予習復習に追われる毎日であっても、自分の好きなワインを憧れのボルドーで学べる日々が苦になるはずもない。「ボルドーの有名な教授や専門家が続々と講義してくれました」。金子さんは一心不乱に勉学に励み、休日も勉強にあけくれた。

大学のクラスの仲間たちと

ワイン好きが嵩じてワインサロンを主宰<その2>
～いつかは本場フランスでワインの会を～

ボルドー市の風景

あるとき、日本から遊びに来ていた妻に、「ワインのプロになるわけじゃなし、楽しむために留学したのに、なんで机に向かってばかりいるの？」と言われてしまう。確かに、そうだった。毎日ワインを学べることに満足していたので、フランスにいながら、どこにも行ったことがなかったのだ。

金子さんは妻のその一言に覚醒する。週末は旅を楽しむようにもなった。時間があればボルドーの町を歩き、フランスのブドウ畑もほとんど行きつくした。留学を通じて、かけがえのない友人もできた。

ワインを中心につながる友人たち

フランス人の友は、外国人が一人ではとてもたどり着けない山間の醸造家を探し出し、車で連れて行ってくれた。ボルドー大学の他学部に留学している日本人とは、フランスという異国の地で知り合ったこともあり、共に研鑽しあう戦友のような存在になった。

「今思うと、57 歳という年齢で留学を決意したのは正解でしたね。60 歳を過ぎていたら、街を歩き回る体力もないし、無理もできなかったでしょう。情熱の赴くままに渡仏できたのは、50 代だったからでしょうね」。2 年の留学を経て改めて感じるのは、「思い切って行ってよかった！」ということである。

金子さんは 2 年の留学を終え、帰国した。ワインを学ぶことだけで、その先の生活のことなどまったく考えていなかった彼を待ち受けていたのは、友たちからの思いもよらないプレゼントだった。

ボルドー第 2 大学醸造学部の校舎

ワイン好きが嵩じてワインサロンを主宰<その2>
～いつかは本場フランスでワインの会を～

シャトー・ド・サルのオーナーと

ワイン会は友人の勧めで開始

国会議員として活躍する高校時代からの友人は、自分のホームページに、金子さんが留学体験やワインの知識・蘊蓄を綴るブログ「ボルドー便り」のコーナーを開設してくれた。現在も連載中で、アクセス数も増え、人気ブログに成長している。

銀座でシャンソニエを経営する友人からは、さらにビッグなプレゼントの申し出があった。「せっかく本場のフランスでワインの勉強をしてきたのだから、それを基に、何か始めてはどうか」という提案だった。友人の店が休みの日に、店を自由につかっていいというのだ。しかも、お金は要らないという。

「まさか、そんな話が出るとは思っていなかったので驚きました。でも、やるのだったら、もちろんワインの会しかありません。友人たちの意見を参考にしつつ、自分なりに計画を立ててみました」。

こうして、2005 年 2 月、金子さんの主催するワイン会「Salon de vin」がスタートした。「妻とは 2、3 回続けばいいほうじゃないかと話していたのですが、今年で、もう 4 年目になりました。今まで、よく続いたものです。われながら感心しています」。

ワイン好きが嵩じてワインサロンを主宰<その2>
～いつかは本場フランスでワインの会を～

本格的なワインをリーズナブルに味わえる会

　このワイン会が長続きした理由のひとつは、銀座で開催されるワインのイベントにしては、料金が驚くほどに安いことだ。会費は基本的に 7000 円。「皆の協力があるから、この価格でできるのです」と金子さん。

　ワインをボルドーにいる友人から入手することや、ロンドンのオークションで友人が落札したビンテージワインを落札価格そのままで提供することもある。当日のスタッフを知人や親戚にボランティアでやってもらうなどの工夫を重ねている。こんな調子だから、毎回の会費は原価分にしかならない。

　「友人のオーナーからも、損だけはしないようにね、と注意されます（笑）。確かに、課題はいかに赤字にしないかということですね。最近のフランスワイン、特にボルドーワインの価格の急騰は、今後会を運営していく上で頭の痛い問題になりそうです」と金子さんは言う。

　しかし、こうした努力の甲斐あって、「Salon de vin」の活動は欧州委員会代表部の機関紙『Europe』に写真入りで紹介され、2008 年には日仏交流 150 周年記念の公式イベントの 1 つに認定され、注目されつつある。

　そんな金子さんの次なる目標は、フランスでワイン会を開くこと。「フランスの友人が連れて行ってくれたようなワインに詳しくなければ入り込めない奥地とか、普通の会では楽しめないよう場所に行って、ワイン会を開催したいですね」。フランス葡萄畑を訪ねる旅を開催したいのだ。

　「夢を持ち続ければいつかは実現するというのは、私の実感です。たとえ夢がかなわなかったとしても、夢をもち続けることが人生には大切だと思いますね」。

　人生に豊かさを与えてくれたワイン、人との縁をいざなってくれたワインを生み出した地へ行きたい――そんな 40 年来の夢をじっくりと熟成させ、花開かせた金子さん。今後も銘醸ワインのごとく、人生の深みを増していくことだろう。

Salon de vin のスタッフと共に

金子さんの「ボルドー便り」

http://perfectnet.jp/bordeaux/

（フリーライター＝杉野治子）

筆者プロフィール

杉野治子（すぎの・はるこ）
技術系専門誌、科学技術情報誌の編集に携わり、モノづくり現場の技術者や研究者などを数多く取材。2002 年秋から約 4 年半中国・上海にて語学勉強のかたわら、現地日本語情報誌のライターとして、ビジネスから街角グルメまであらゆる方面の取材・執筆に携わる。帰国後はライター業とともに、趣味の街歩きとうまいもの探しにいそしむ毎日。

プロデューサ紹介

松本すみ子（まつもと・すみこ）
早稲田大学第一文学部東洋史学科卒業。
IT 業界で 20 数年、広報、販促、マーケティングを担当。
2000 年、団塊/シニア世代の動向研究とライフスタイルの提案、コンサルティング、執筆などを主要な事業とする有限会社アリアを設立。2002 年 9 月、シニア世代の仲間づくり・活躍の場づくりの会「おとなのオピニオンコミュニティ Ryoma21」を主宰。2007 年、NPO 法人シニアわーくす Ryoma21 となる。日経 BP 社の情報サイト nikkeiBPnet にて「団塊消費動向研究所」を連載中。著書に、「そうだったのか！団塊マーケット」、「心理系の仕事を見つける本」などがある。